

＜自由に孕まれた矛盾＞のドラマトゥルギー：シ ラー『ドン・カルロス』について

森, 直貴
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/21878>

出版情報：九州ドイツ文学．22，pp.1-22，2008-11-29．九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：



〈自由に孕まれた矛盾〉のドラマトゥルギー

— シラー『ドン・カルロス』について —

森 直 貴

0. 序

本論は、シラーの劇『ドン・カルロス』¹⁾を〈自由に孕まれた矛盾〉のドラマトゥルギーという観点で読み取り、従来の『ドン・カルロス』研究でしばしば扱われてきた筋の統一の問題に一つの回答を出す試みである。

シラーは「自由」の理念を主要登場人物二人（ドン・カルロスとポーザ侯爵）にそれぞれの思考の核として与え、そのことを通してこの理念を作品の思想の核となし、且つ、この理念こそを、『ドン・カルロス』を構成する力となそうとした。この意味で、『ドン・カルロス』という作品を支えるドラマトゥルギーは「自由のドラマトゥルギー」と呼ぶことができる。事実、これまでの研究者たちは、こぞってこの見方に立って『ドン・カルロス』を論じ、そしてそれゆえに、筋の展開において主人公の役割が途中でカルロスからポーザへと移ってゆくことに筋の不統一を見て取り、『ドン・カルロス』研究史は目下、そこで立ち止まった状態にある。²⁾

「自由のドラマトゥルギー」という捉え方の基盤となるのは〈自由—運命〉という対立であろう。つまり、ある〈自由〉を志向する人間が、それに対立する秩序、陰謀などによって破滅に追い込まれ、悲劇となる構造である。『ドン・カルロス』における二人の登場人物が有する〈自由〉は異なった性質を持つが、本論は、そのそれぞれが〈自由に孕まれた矛盾〉を抱え、それを運命と捉える視点によってこの劇を論じ、〈自由—運命〉の対立ではないところに劇の統一を見出そうとする試みである。

この劇に筋の統一を見ている研究において代表的なものとしては、この劇を一貫して「王侯の家庭における家族の肖像」を描いた家庭劇であると指摘したコープマンの論³⁾が挙げられる。しかし、フランドルの解放計画に代表されるポーザの道徳的世界秩序の構想を、「兄弟」という彼の言い回しからのみ家庭劇に引き付けるのは無理があるのではないか。

シラーは、『ドン・カルロス』についての書簡⁴⁾において、この劇の主題を「国家がどれだけ繁栄しようとも存在する個人の可能な限りの自由を通じた、また人類の完全な状態を通じた純粋で穏やかなフマニテートの普及」としている。ここに、個を志向する自由と人類を志向する自由の二つが現れている。前者が婚姻制度に反するカルロスの愛に、後者が人類全体の幸福を目指すポーザの自由思想に妥当するといえよう。この二つの「自由」の弁証法的な発展がこの劇で試みられ、古典主義的な理想状態とされる「フマニテ

ト」⁵⁾に至るとシラーは考えている。この劇はシラーの思想傾向が、シュトゥルム・ウント・ドラングから古典主義への移行する際に書かれたものであり、処女作『群盗』では個を志向する自由から人類を志向する自由までの段階でとどまっていた思想がさらに発展する兆しが見える。シラーの処女作『群盗』では、主人公カール・モーアにこの内の二つの形態が与えられているといえるだろう。カールは劇の中で、法を、人間の偉大さを歪めて英雄の人間を凡庸な人間に作り変えてしまうものとみなし、盗賊団を結成して放火や殺人を繰り返し、「法からの自由」を得ようとする。これがすなわち「個を志向する自由」であるが、劇の最終場でカールは自ら法に身を委ねることとなる。

しかし、まだおれにはあることが残されている、それを使って、おれは侮辱された法をなだめ、乱暴に扱われた秩序を癒すことができる。秩序は一つの犠牲を必要としている——その犠牲は、秩序が持つ犯すべからざる威厳を、全人類の前で広げて見せるのだ——この犠牲となるのはおれ自身だ。おれは秩序のために死なねばならないのだ。⁶⁾

「秩序が持つ犯すべからざる威厳を、全人類の前で広げて見せるのだ」という台詞には、人類を志向する自由が読み取れる。『ドン・カルロス』においては、この二つの「自由」が二人に登場人物に与えられることにより同時に存在しつつ、その発展が試みられるのである。

1. 個を志向する自由

1-1. なぜ愛が自由となりうるのか

カルロスは、父親でありスペインの王であるフィリップの後妻エリーザベトを愛している。愛と制度の間の葛藤というモチーフはシュトゥルム・ウント・ドラング期の作品にしばしば登場し、例えば、レンツの『家庭教師』では階級制度に反する愛が、ゲーテの『若きヴェルターへの悩み』では『ドン・カルロス』と同様に婚姻制度に反する愛が描かれた。しかし、シラーはその時期に『群盗』や『フィエスコの叛乱』といった、アナキスト、あるいは共和主義者を主人公とした政治劇も書いており、『ドン・カルロス』でも、フランドルの解放を目指すポーザの思想にだけでなく、エリーザベトに対するカルロスの愛にも政治性が付与されている。カルロスはエリーザベトへの愛をポーザに告白した後、次のように言う。

おまえの言いそうなことはすでに分かっている。

息子が母を愛するのだ。世の中の慣習、

自然の秩序、そしてローマの法が

この情熱を有罪とみなしている。おれの要求は

恐ろしいことにわが父の権利と衝突する。

おれはそれを感じているが、それでもなお、愛するのだ。この道は
狂気か断頭台にしか辿りつかない。

おれは希望のないままに愛するのだ——徳に反して——

死の不安を持ちながら、生命の危険を感じながら——

おれにはそれが分かっているが、それでもなお、愛するのだ。(374)

カルロスは自分の愛が「父の権利と衝突する」と言い、その「権利」を裏付けるものとして「世の中の慣習」、「自然の秩序」、「ローマの法」の三つを挙げている。「世の中の慣習」と「ローマの法」は、権力と結びついた婚姻制度の二つの形態、すなわち慣習法と成文法と考えることができる。法や制度への反抗という構図は『ドン・カルロス』以前にも用いられた。上述したように、処女作『群盗』においては、主人公カールが法制度を、英雄的精神を抑えつけるものとみなして、法制度に対する反抗として放火や殺人を繰り返す。しかし、カルロスの愛には「自然の秩序」への反抗という要素が付け加わる。『群盗』の中で自然への反抗を示していたのはむしろカールの弟のフランツであり、このフランツは自らを次男としてこの世に誕生させたもの、あるいは、兄と似ても似つかない醜悪な顔、凡庸な能力を与えたものとしての自然に対して、怒りをぶつける。⁷⁾ カルロスは、自分と父を「二つの折れ合うことのない対極」、「人類の両端」、「二つの敵対する星」と呼んでおり、自然が両者を「神聖な絆を通してむりやり一緒にした」(376)と考えており、この「自然の秩序」は父子関係を意味する。カルロスにとって、フィリップは父親というよりも権力者である。権力者としてのフィリップというカルロスの心象は、生まれて初めてフィリップと対面したときから存在しており、そのとき、フィリップは死刑執行書にサインをしているところであった。フィリップはサイン一つで人の命を奪えるほどの権力を持っているのであり、Vater (父) という「恐ろしい二音節」に関して、カルロスの心に「戦慄と罪人の恐怖」(375) が刻印されることとなる。カルロスの恐れている名が、König (王) ではなく Vater であることに注意したい。フィリップにとって、あるいは廷臣たちにとって、死刑執行書へのサインが命令や承認としての効力を持つのは、そのサインに王としての権力が法の根拠となって含まれているためであり、このとき私人フィリップ、カルロスの父親という要素は問題とならない。しかし、カルロスにとって、王と父は区別されず、フィリップは権力者としてのみ現れるのである。フィリップが、元々カルロスの婚約者であったエリーザベトを、婚姻制度を利用して自らの妻としたとカルロスは考えている。カルロスがエリーザベトへの愛を巡って父＝権力者へ反抗することにより、「自然の秩序」への反抗と婚姻制度への反抗は一致するのだ。つまり、『群盗』において、フランツが有する自然への反抗という要素、カールが有する法や制度への反抗という要素が、カルロスの愛において重なるのである。カルロスの愛は、婚姻制度、「自然の秩序」に反しているという要素が付け加わり、〈自由〉という相貌を帯びる。

1-2. 〈個〉を志向する愛

では、なぜカルロスはこれほどまでに愛に拘るのであるのか。彼は、ポーザに対しても愛という言葉を使う。⁸⁾ 確かに、彼のポーザに対する愛は友情と言い換えられる感情だが、しかし同時に彼のエリーザベトに対する愛との親縁性を持っている。彼はポーザに、自分を敬称 Sie [あなた] ではなく親称 du [おまえ] で呼ぶように頼み、スペインの秩序が有する階級構造に縛られない関係を得ようとする。それどころか、彼は自分とポーザの関係を「自然が作り出す以上に高貴な絆を通して結ばれた兄弟」(614) とも言っており、彼はエリーザベトへの愛と同様、「自然の秩序」よりも強い関係をポーザへの愛に求めているのだ。これは、カルロスの考える愛がその対象である人物の性質によって規定されているためである。

侯爵〔ポーザ〕(……) もし、私が

あなたを恐れ憚らねばならないとしてもなお、

あなたをこのように心から愛することができるでしょうか？

カルロス そんなことは決して起こらないだろう。

おまえはおれを必要としているのか？ 玉座のおこぼれに与るような欲を

持っているのか？ 金がおまえを惑わすことがあるのか？

おまえは、いつかは王になるおれよりも

豊かな臣下だ。——おまえが

名誉を欲しがることがあるのか？

青年になるころにはすでに、おまえは

名誉の限りを汲み尽くし——その名誉を拒絶したのだ。(408)

カルロスが人間の豊かさを測る尺度は、王が臣下に対して与える金や名誉ではなく、むしろそれらによって測ることのできない余剰部分を持っているか否かにある。ポーザの場合、その余剰部分の存在が名誉の拒絶という形で証明されているのである。それゆえ、カルロスにとって、スペインの秩序の中における差異は問題とならない。カルロスは、軍の指揮能力の高さによって帝国の拡大、安定に貢献したアルバや、権謀術数に長け、いずれは大僧正になるとされているドミンゴといった、フィリップの側近たちを愛さず、むしろ自分から遠ざけようとする。例えばカルロスは、第一幕第一場では、自分がふさいでいる原因をドミンゴに問われても答えようとせず、また第二幕第一場では、自分とフィリップの対話にアルバが同席することを拒否する。つまり、これら秩序内で枢要な地位に就いている人物たちには、彼らが秩序に取り込まれているために、秩序からの逸脱が存在することはない。他方、秩序内におけるカルロスの王子という地位を必要としないポーザには、秩序からの逸脱において現れる〈個〉が見出されているのだ。ここで、愛する主体であるポーザが〈個〉として現れていると同時に、その客体であるカルロスもまた、秩序における地位を離れた〈個〉として現れていることは注目に値する。カルロスの考える愛によっ

て、それに関わる人間相互に〈個〉が現象するのである。

エリーザベトに対するカルロスの愛に関しては、ポーザに対する愛を規定していたところの、王が臣下の功績に応じて名誉を与える制度からの逸脱に代わって、婚姻制度からの逸脱が問題となる。しかし、婚姻制度は、エリーザベトがカルロスの婚約者であったときには、むしろ、両者の愛を保証するものであった。カルロスは、自分とエリーザベトの婚約を「二つの偉大な王室によって私に与えるよう認められ、／天と自然によって承認された」(393)ものとみなす。この婚約と、フィリップとエリーザベトの婚姻関係の違いはどこにあるのだろうか。カルロスはエリーザベトに向かって次のように言う。

あなた〔エリーザベト〕はいったいこの国の中では何者なのですか？ 聞かせてください。

ひょっとして統治者ですか？ 決してそうではありません！もしあなたがアルバの首を絞める統治者ならば、このことがどうして有り得ましようか？

どうしてフランドルが信仰のために血を流すことが？

どうして有り得ましようか、或いは、あなたはフィリップの妻ですか？ そんなはずはありません！

私にはそんなことは信じられません。妻というものは夫の心を

占有するものです——では、あの方〔フィリップ〕の心は誰のものでしょうか？

そして、あの方はあらゆる細やかな愛情を、

それらはひょっとすると、熱に浮かされるとあの方は見逃すかもしれませんが、

そんな愛情を、王笏や、自分の白い髪に請い求めるのではないですか？ (394)

カルロスの考えでは、フィリップは王や老人として、すなわち、地位や境遇を通してエリーザベトに愛されているのであって、彼の〈個〉が愛されているのではない。エリーザベトの性質は、婚姻関係における妻という立場や、その婚姻によって得られた統治者という地位にも反映されていない。次のカルロスの台詞に示されるように、フィリップが愛する主体となるときもエリーザベトの〈個〉は現れない。「あの方〔フィリップ〕は自分がどれほど豊かであるかご存知でしょうか？ あなた〔エリーザベト〕の心の価値を／感じ取る心があの方にはあるでしょうか？ ／私があなたと一緒にいて／どれほど幸せであったかは／忘れましよう——あの方が幸せでさえあれば、／でもあの方は幸せではありません。それが、それが地獄のような苦しみなのです！」(393)。フィリップとエリーザベトの婚姻には、制度による承認だけが存在し、その内実としてのカルロスが考える〈個〉を志向する愛を伴っていないのである。それゆえ、エリーザベトという〈個〉は、スペインの秩序の外、婚姻制度の外にあるとして、カルロスは彼女に自己規定を求めるのだ。婚姻制度に反して〈個〉を志向する愛を貫こうとするカルロスには〈個〉を志向する自由が現れている。

しかし、第一幕第五場のカルロスとエリーザベトの対話場面において、彼女は「私とも

はや愛することはありません」(395)と言って、彼の愛に応えることはない。ここで、エリーザベトが「何のためにあなたと私が従わなければならない運命を悲しく分析するのですか」(395)とカルロスに問うとき、彼女は婚姻制度に従っており、カルロスが愛する対象に求める制度からの逸脱は彼女に生じていないのである。こうして愛の対象を失ったカルロスは失望する。

2. 人類を志向する自由

2-1. 自然認識を通じた自由思想

ポーザは、第三幕第十場において、自らの理想とする世界像をフィリップに語っている。まず、ポーザの功績を廷臣たちから聞いていたフィリップが彼に望みの地位を尋ねるが、ポーザはスペインの中にはそのような地位はないと答える。すなわち、ポーザは、「王侯の召使にはなることはできない」(509)と言って、秩序に拘束されない人間であることを示し、自らを「世界市民」Bürger dieser Welt (508)と規定するのである。「世界市民」Weltbürger⁹⁾という概念は、啓蒙主義の時代にカントやレッシングによって好んで用いられ、思想や宗教の違いを超えた共同体を理想とする人物を指す。ポーザは、世界市民として、プロテスタントであることを理由にスペインから弾圧を受けるフランドルの民衆に「思想の自由」Gedankenfreiheit (516)をもたらすよう、フィリップに進言する。ポーザの自由思想は彼の自然認識に基づいている。

侯爵〔ポーザ〕 あの方〔神〕の作られたすばらしい自然の中で
 ご自分の周りを見渡してください。自然は
 自由を基にして作られています——そして、自然は自由を通して
 どれほど豊かになっていることでしょう！ 偉大な創造主であるあの方は
 一滴の露の中に虫を投げ込み、
 もろもろの腐敗した死の空間にもなお
 恣意が楽しむままにしておられます——あなたの創造は
 どれほど窮屈で貧しいことでしょう！ 一枚の葉のざわめきが
 キリスト教世界の主を脅かし——あなたは
 あらゆる徳に対して震えなければなりません。あの方は——自由が
 魅力的に現れるのを妨げないように——
 あの方は恐ろしい群れとなった害悪が
 ご自分の天地の中でむしろ荒れ狂うままにしておられます——あの方に、
 その芸術家に人は気付きません。あの方は
 永遠の法則の中に、懐み深くご自分を包み隠されます。
 自由思想家はその法則を見ますが、あの方を見てはいません。「何のために
 神がいるのか？」と自由思想家は言います、「世界は世界であるだけで十分だ」。

そして、いかなるキリスト教徒の信心もあの方を、
この自由思想家の中傷以上に称えたことはありません。(516)

ポーザにとって、神の造った自然の中では個々の創造物は本来互いに衝突するものであり、「死の空間」、「恐ろしい群れとなった害悪」の中にこそ「自由」が現れている。それに対して、スペインの秩序は「自由」に怯え、「自由」を抑え付ける。世界市民としての視点からポーザが見るのは、スペインの秩序を超えたところにある、個々の創造物それぞれが「自由」を享受することで生まれる「永遠の法則」である。彼は、無神論者ではないが、神という超越的な原理から演繹して世界を把握せず、「自由思想家」と同様に、個々の自然の関係を見て特殊から普遍へと遡る思考によって、世界全体を支配する法則を導き出す。

ポーザのこの思想の根底にあるのは、自然の有機的な運動を原動力とする発展的歴史観に他ならない。ポーザは自らが「到来しつつある／後のいくつもの世紀の市民として生きている」(511)と考えており、自然の混沌の中に「永遠の法則」をみる空間的な視点だけでなく、時間的な視点においても俯瞰的に世界を捉えている。ポーザの理念に従うと、この劇の舞台となっている十六世紀は「成熟していない」(511)段階であり、彼は成熟への兆しとして、新教徒の台頭によって生じた旧教徒と新教徒の信仰を巡る争いを挙げる。この争いは、「キリスト教徒の成熟した変化」、つまり一つの発展であり、この発展をもたらすものは「止まることなく全速力で転がる世界の宿命の車輪」(514)である。この「車輪」の比喩に現れているように、集合体としての自然は、個々の創造物が多様性を呈するのに対して、主体的に統一へと向かう運動をする。ポーザにとって絶対的なものは、世界の変化をもたらす、自然が持つこの法則であり、歴史上に生まれた数々の人工的な秩序は相対的なものにすぎず、当然ながら現在のスペインの秩序も例外ではない。それどころか、スペインの秩序は自然の計画が進行するのを妨げている。なぜなら、フィリップが「人間たちを創造者の手から奪って、／自分の手で作った作品に変えた」(512)ために、秩序の中にいる人間たちは自らの意志ではなく、法に従って行動しなければならず、自然の発展の基盤となる個々の創造物の対立が生じないからである。それゆえポーザは、スペインの弾圧によって苦しめられているフランドルを解放しようとするのだ。

では、ポーザはこのような思想の実践のためにどのように行動するのであろうか。

しかし、私にとっては、
私にとっては徳が固有の価値を持っています。通常ならば君主が
私の手を使って植えつけるであろう幸福を
私自身が作り出すでしょう。そして私にとっては義務にすぎないものが
私にとっての喜び、そして固有の選択となるでしょう。
そして、このことは陛下のご意向でしょうか？ 陛下は
ご自分の創造物の中に、見慣れない創造者がいることに耐えられるでしょうか？
しかし、芸術家になることができるところにいる自分を、

私は鑿にまでおとしめるべきでしょうか？ —— 私は
人類を愛しており、君主制の中では
私は私自身よりほかに誰も愛してはならないことになってしまうのです。(509)

人間を「鑿にまでおとしめ」、個々の自然の「自由」が発現することを阻害する秩序の中にあっても、ポーザは「徳」Tugend に従うという。他方、ポーザによれば、君主制の中にいる人間たちは「自らの内なる偉大さという幽霊に慄いて逃げ出し、自らの貧困を得意がり、自らの鎖を臆病な知恵で飾り立てては、その鎖を礼儀正しく身に着けることを徳と呼ぶ」(512)。スペインの秩序内の人間たちは、自らの偉大さを発揮するどころか、秩序の道具として自らを喜んで捧げて秩序を下支えする。彼らの徳は秩序に進んで従って秩序に適ったものを創造することだが、それに対してポーザは、外から与えられた義務ではなく自らのそれに従って創造することを「徳」と言う。ポーザの考えに従えば、「人類」とは、スペインの秩序が形作る法則より高次の領域にある「永遠の法則」に従って発展を続ける、集合体としての人間である。秩序内の人間たちの創造は秩序を強固にするだけであって、「人類」の発展を引き起こしはしない。それゆえ、ポーザはそのような人間たちを愛することはできない。その一方で、フランドルの民衆は、「力強い、偉大な民衆」、「善良な民衆」(513)であるが、自らの徳に従ってプロテスタントとして生きているため、叛乱を恐れるスペインの軍隊によって弾圧されている。自然認識に基づくポーザの道徳理論は作られ、スペインによるこのフランドルの弾圧を不正とみなす。ポーザが、カルロスの前で自らを「人類全体の代表」(369)と呼び、カルロスにフランドルの解放を求めるのは、フランドル人たちの〈自由〉によって人類全体の発展を引き起こすためであり、ポーザの思想に現れるのは〈人類を志向する自由〉である。

2-2. 政治的悟性

フィリップとの対話場面において、ポーザは、自身の持つ理念について話すのみで、自らの企図する諸々の計画については話さない。しかし、実は、彼はフランドルの諸侯たちとともに密かに叛乱を企てており、その指揮をカルロスに執らせようとしているのである。

カルロスとポーザは、共に大学で学んでいた頃、前節で述べたような自由思想の実現を夢見ていた。しかし、ポーザがヨーロッパの国々を巡る旅から帰ってきたとき、つまりこの劇が始まる時点においては、カルロスにとってはエリーザベトへの愛が最も重要となっており、カルロスはポーザの自然認識に基づいた世界構想を「子供じみた」ものとみなし、「この夢は過ぎ去った」(370)と言う。とはいえ、ポーザにとって、カルロスを指揮官とする叛乱計画の望みが絶たれたわけではない。ポーザはカルロスの愛について、「私は、世界がただ死だけを見るところに生を見るのです——この希望のない炎の中に私は早くから、希望の金色の輝きを認めていました」(585)と述べている。というのも、婚姻制度に反する愛に現れる〈個を志向する自由〉は、〈人類を志向する自由〉と、制度への反抗とい

う点では一致しているからだ。フランドルにおける叛乱計画が目的とするのは、スペインの秩序からポーザの考える道徳的世界秩序への制度転換に他ならない。ポーザにとっては、この目的の実現のために、エリーザベト個人に向けられたカルロスの自由を人類全体へと向けることが必要である。ポーザは、エリーザベトを通じてカルロスを説得し、この計画に参加させようとする。

しかし、ポーザはその一方で、フィリップに謁見する機会を利用して、叛乱とは別の方法でフランドルの解放を目指す。彼は、自分が宮廷では力を持たない人物であるにもかかわらず実現したこの機会を「偶然」と捉え、次のように独白する。

偶然とは、
彫刻家の手のもとで生を受ける粗い石以外の
何であろうか？ 偶然を与えるのは神慮だ—— 目的のために
人間はそれを造形しなければならない—— 王がおれとともに
何をしようと望んでいようがどうでもいい！ —— おれには分かっている、
自分が—— 自分が王とともに何をすべきかが—— たとえそれが、
火の粉のような真実にすぎなくとも、
専制君主の魂の中に大胆に投げ込まれれば——
神慮の手の中は何と実りの多いことだろう！ そうすれば
初めはこれほど風変わりに見えたものが、たいそう目的になかった、
計算されたものとなるかもしれない。そうなるかどうか——
そんなことはどうでもいい！ おれはこの信念を持って行動するぞ。(505)

ポーザがフランドルの解放に向けた政治的行動をするとき、彼の—— 道徳理論においては「徳」と呼ばれた—— 義務は、目的論的性格を帯びる。フィリップは、ポーザが打ち倒そうとするスペインの秩序の頂点に君臨する人物ではあるが、その絶対的な権力でもってその秩序を変質させることのできる人物に他ならない。つまり、フィリップはフランドルの民衆を苦しめており、ポーザにとって忌避すべき人物ではあるが、ポーザがうまく説得すれば、フランドルを解放するかもしれない。確かに、ポーザはフィリップとの対話において、スペインの秩序を否定して自らの自由思想を展開してみせるが、所々、彼の政治的人間としての計算高さが姿を見せる。例えば、彼は、スペインから逃げ出したプロテスタントを積極的に受け入れているイギリスが、彼らのもたらした技術によって発展を遂げたことを挙げて、国政のためにもプロテスタントが必要とされることを示唆する(514f.)。この後のト書き「王は心を動かされ、侯爵はそれに気付いて、王に一步近づく」を見逃してはならない。ここで、ポーザはフィリップの王としての自尊心を見事に刺激しており、絶対王政的思想とポーザの自由思想との間の討論を有利に進めている。このように、ポーザには目的論的な政治的悟性も現れており、これは彼とカルロスの関係にも示されている。

彼は「私はごく少数の者にしか与えられないような幸運に恵まれました、つまり、私は

王の息子を愛したのです——ある一つのことにのみ捧げられた私の心が、世界全体を包み込んだのです！——私は、わがカルロスの魂の中に、数百万人のための樂園をもたらしました」(582)と言う。カルロスが、秩序からの逸脱においてポーザの〈個〉を見るのに対して、ポーザの政治的悟性は王子としてのカルロスを見るのだ。ここに〈人類を志向する自由〉と〈個を志向する自由〉の相違点が現れる。

3. フィリップの二種類の権力

フィリップの権力は、カルロスの自由に見れる〈個〉へのベクトルと、ポーザの自由に見れる〈人類〉へのベクトルの両方を持っている。『ドン・カルロス』において、フィリップの権力は、カルロス、ポーザの持つ自由を相対化する機能を有する。

3-1. 個を志向する権力

フィリップはスペインの秩序の頂点に存在しているが、そのような権力存在とは異なった自己をも求めている。

王 わしは

洗礼を受けた世人の中で最も豊かな男であり、

わしの国では太陽が沈むことはない——

しかし他の人間がすでにそれらをすべて占めていたし、

わしの後に続く少なからぬ他の人間たちが、なおも占めることだろう。

わしのものとはこういうものだ。王が所有しているものは

幸運に恵まれて得たものだ——エリーザベトはフィリップのものだ。

わしが死すべき人間である所以はここにあるのだ。(402f.)

フィリップは自身を「洗礼を受けた世人の中で最も豊かな男」と規定しているが、これは王としての自己規定にすぎない。彼によれば、王は歴史的に受け継がれるシステムの中の一つの機能にすぎず、王としての彼は交換可能なもの、偶然的なものである。それゆえ、スペインが領有している土地、あるいは臣下たちといった王の所有物から還元してフィリップという一人の人間の存在を規定することはできない。そこで彼は、王としての自己規定に内包されたこの帰納法的論理を用いて、秩序から離れた〈個〉としてのフィリップの存在を保証する所有物としてエリーザベトの名を挙げることとなる。つまり、ここでいうエリーザベトとは、フィリップにとってスペインの秩序の中の一機能としての王妃ではなく、〈個〉としてのエリーザベトであり、フィリップは彼女を「所有」することを通して、スペインの秩序の頂点としての自己と並存する〈個〉としての自己を規定しているのである。

無論、この「所有」の端緒となったものは婚姻制度——すなわちスペインの秩序の基盤

である法——に他ならず、エリーザベトもまた、王としてのフィリップの所有物とも言えるだろう。しかし、フィリップは、「わが民衆に関することを保証するのはわしの剣と／——アルバ公爵だが、わしに対する妻の愛を保証するのは／わしのこの目だけだ」（402）と言って、エリーザベトに関することを王権の支配体制に組み込まず、徹底的に自分の管理下に置こうとする。ただ、注意すべきは先ほどの引用の「王が所有しているものは／幸運に恵まれて得たものだ——エリーザベトはフィリップのものだ」と同様に、王権の思考構造と個人的人間フィリップのそれが彼の台詞の中で並列的に用いられていることだ。フィリップが求めるのは王としての権力を〈個〉としても持つことであり、エリーザベトの心を支配し、彼女を「所有」することによって、歴史の中で機能として繰り返される王たちの中に存在する個人的人間フィリップを確認しようとしている。つまり、フィリップには、自分以外のすべての人間を支配しようとする王としての権力とともに、〈個を志向する権力〉が現れているのだ。この二つのベクトルにおいて前者がポーザの自由に、後者がカルロスの自由に対応する。

フィリップは、エリーザベトがカルロスを愛しているのではないかと疑わせる証拠をエーボリから受け取るに至って、自らの「所有」が揺らぎ始めるのを悟る。陰謀を企むアルバやドミンゴからもその疑いを強くするような話を聞かされるが、彼はそれを信じようとしなない。なぜなら、それらの讒言をする人物たちはスペインの秩序の中にいる人間であり、自分のことを「人が自分の思うがままに引くにすぎない弓」（496）、つまり宮廷内の地位獲得のために利用するシステムの中心とみなしている、とフィリップは考えているからである。〈個〉としてのフィリップは、廷臣たちにとって、自分たちの利害関係とは関わりのないものであって、存在しないに等しい。¹⁰⁾ フィリップは言う、「わしは真実を必要としている——真実の静かな泉を／誤謬の瓦礫の中で掘りあててことは／王たちの宿命ではない」（498）。スペインの秩序の中では、もろもろの言説に話者の利害が付け加わっており、それらの言説の集積は真実からほど遠い「瓦礫」の山にすぎない。さらにはフィリップの思考構造もまたスペインの秩序に囚われているために、彼自身の手で真実を掴むこともできない。フィリップが求めているのは、スペインの秩序という枠に嵌められた「真実」ではなく、普遍的な真実である。

スペインの秩序の中心にいるフィリップがアルバやドミンゴの言説を信用しないことによって、劇の中で陰謀の持つ役割は極端に小さくなる。『群盗』で、フランツによる陰謀によってカールは父親から勘当されることになったように、あるいは『たくらみと恋』で、ヴルムの陰謀によってフェルディナントがルイーゼの貞節を疑うことになったように、シラーの作品では陰謀が運命連関に関わることもある。しかし、『ドン・カルロス』においてアルバやドミンゴの陰謀がフィリップの行動に決定的に働きかけることはない。

3-2. フィリップとポーザの結びつき

王フィリップは真実を求める。真実を求める権力者——これは後期シラーの劇作品である『ヴァレンシュタイン』と同じ構造を持っている。この劇の中で、ヴァレンシュタイン

は数々の戦功を立てたにもかかわらず、レーゲンスブルクの評議会において望みの地位を得られなかったため他者に対して不信感を抱き、占星術という一個の独立した学問の中に真実を求めた。『ドン・カルロス』において占星術のような独立した思想を持った人物、スペインの秩序に拘束されない独自の思考構造を持った人物はポーザである。フィリップは自身の備忘録の中にポーザという見慣れぬ名前を見出して次のように言う。

ポーザ侯爵？ — ポーザ？ ポーザ？ やはり
この人間のことをほとんど思い出せない！
さらに二重に下線が引いてある — わしが
偉大な目的のために彼を指定しておいた証拠だ！
それにしてもそんなことが有り得るのか？ この人間は
今までわしと会うことを逃れていたのか？ この者に
恩を返すべき王の目を避けていたのか？
神にかけて！ わしの国家の周囲全体で
わしを必要としない唯一の人間だ！
この者が所有欲か、あるいは名誉心を持っているなら、
ずっと昔に、わしの玉座の前に現れていたことであろう。
思い切ってこの変人と語り合ってみるか？ わしがいなくとも
よいと考える人間なら、わしのための真実を知っていることであろう。(498)

〈スペインの秩序の頂点に立つ者〉と〈個的人間としての権力者〉——フィリップの二種類の自己認識はこの引用の最後の逆説的な文に現れている。最初の「わし」が前者の性質を、二番目の「わし」が後者の性質を表しているのである。どちらの性質も権力と関わっているが、彼は王がいなくともよいと考える人間、すなわちスペインの秩序から逸脱した人間を求める。これは、カルロスの愛が、王子としての彼を必要としないポーザ、秩序からの逸脱に現れる〈個〉としてのポーザを志向するのと同様の構造を持つ。ここにポーザが「偶然」と捉えた反転が現れ、第三幕以降ポーザが劇の中心人物となっていく原因がある。ただし、フィリップが求めているのはポーザが持つ〈人類を志向する自由〉ではなく、〈個〉としてのフィリップを志向する〈自由〉である。フィリップは、スペインの秩序の思考構造に従って王という機能は永遠不変のものと考えており、ポーザと異なり、スペインの秩序を超える法則を見ることができない。つまり、フィリップは常にスペインの秩序に基づいて思考し、彼が普遍と考えるこの秩序を人間という特殊なものに当てはめて判断するが、ポーザは、逆に特殊から普遍へと遡る思考構造を持つ。それゆえ、フィリップはカルロスと同様に、ポーザの自然認識に基づいた道徳的世界秩序を認めない。フィリップとポーザの対話において、ポーザが自身の発展的歴史観に即して「思想の自由」を与えるようフィリップに願う箇所では、フィリップは相手を「風変わりな夢想家」(516)と言い、ポーザの自由思想を「毒」(518)とみなして、世界市民としてのポーザには興味を示さな

い。しかし、フィリップは「わしが望んでいたのは真実ではなかったか？／むしろ、ここでいくらかそれ以上のものを見つけてしまった」(519)と言う。「真実」は彼にとってエリーザベトの「所有」の根拠となり、〈個的人間〉フィリップの権力を保証するものだったはずである。「真実」以上のものとは何であろうか。

王（ポーザの姿に見惚れて） わしは
 このような人間を一度も見たことはなかった。——一度も！
 一度もなかったのだ、侯爵！ おまえの言うことはひどすぎるぞ。わしは
 ネロにはなりたくない。そうはなりたくないのだ——おまえに対して
 ネロにはなりたくない。幸福がすべて
 わしの下で朽ち果てるというわけではない。
 おまえ自身は、わしの目の届く範囲では
 人間であり続けてくれ。(518)

王を一人の人間とみなすときにのみ、ポーザは、〈個〉としてのフィリップを見ることができないスペインの秩序の機能不全を補う。なぜなら、彼にとってポーザは「公正な」gerecht (521) 男であり、ポーザの〈人類を志向する自由〉はフィリップの思考構造に浸透しているスペインの秩序にまったく欠けているものだからだ。フィリップは、自らを王と個的人間に分離したのと同様に、ポーザを「人間」と世界市民に分離して、彼を「人間」として所有することを望む。それゆえ、フィリップはポーザに、「エリーザベトと内密に話す権利」(521)を与え、これまでは自分にしかできないと言っていたエリーザベトの監視をポーザに委ね、ポーザをこの場面以後取り次ぎなしで王の部屋に通すように命じ(521)、スペインの秩序に属する礼式を彼らの関係においては取り除く。そして、ポーザの死後には「あいつ〔ポーザ〕だったら／わしと王国を分け合うこともできたのに」(627)という台詞まで口にする。つまり、「おまえに対してネロにはなりたくない」という言葉には、権力を共有することで両者が結びつくという意味が表れているのである。フィリップはこの権力共有の結びつきにおいて、カルロスとポーザの結びつきと同様にスペインの秩序から離れた形式でポーザとの関係を保とうとするが、その関係を形作るために用いられるのはカルロスの考える愛ではなく「名誉」である。

おまえ〔ポーザ〕が僅かな時間でわしにとってどのような者となったか、
 それはあいつ〔アルバ〕が一代かけてもなれない者だ。
 わしは自分の好意を秘密にしておきたくない、
 王の寵愛の印は
 おまえの額の上に、明るく、遠くまで届くように輝くべきだ。
 わしは、自分が友として選んだ男が
 羨まれるのを見たいのだ。(554)

フィリップの寵愛によってポーザが獲得するのは、アルバやその他の廷臣たちとの差異、すなわちスペインの秩序内における差異である。カルロスの持つ〈個を志向する愛〉が、名誉を拒絶する〈個〉としてのポーザに向かうのに対して、フィリップは名誉を与えることによってポーザを秩序内に取り込み、秩序からの逸脱として現れる〈個〉を秩序内における差異によって構築し直すことに向かう。つまり、ポーザを通してフィリップが目指すのは、王としての権力と〈個〉としての権力の一致である。というのも、〈個〉としての権力は、王としての権力を基盤として導き出されたからだ。しかし、ここにフィリップの矛盾があり、それは、大審問官とフィリップの対話から明らかになる。

第五幕において大審問官が登場することによって、フィリップの権力がより大きな権力から与えられたものにすぎないことが示される。スペインの秩序の頂点にあるのはカトリックの教義であり、大審問官は王をも異端審問にかけける権限を持つ。カトリックの教義に照らし合わせるならポーザは異端者であり、大審問官は、ポーザを異端審問所へ引き渡さなかったことで、フィリップを断罪する。

王 わしは人間が一人欲しかったのだ、あの
ドミンゴたちは――

大審問官 何のために人間が？ 人間たちは
あなたにとって数にすぎない、それ以上の何者でもない。

(中略)

あなたが

泣いて同情を求めるなら、世の中の者が自分と同等であると
認めたことにならないか？ あなたが、自分と同等な者に対して示す
どのような権利を持っているのか、知りたいものだ。(638)

王権は、一人の王が多数の人間を秩序に従って支配して、王と臣民の間に差異を形作ることと規定されており、ポーザを秩序内における差異によって、王と同じ位置にいる一人の「人間」として認めることは、その秩序を否定する。〈個を志向する権力〉を秩序内において適用することは、その権力の基盤となる王権の否定に転化するという矛盾がフィリップにおいて現れているのだ。

4. 自由に孕まれた矛盾

4-1. カルロスにおける〈自由に孕まれた矛盾〉――愛の成就不可能性

カルロスの愛は婚姻制度に反しているため、スペインの法に従えば罪となる。それゆえ、この愛が秩序内にいる人間に知られ、フィリップにそれを密告されれば、彼は処罰されることとなる。このような状況から身を守るために、彼はこの愛を秘密にする。カルロスは、密会を求める女の手紙を受け取り、それをエリーザベトが送ってきたものと思い込む（実

際はエーボリが書いた手紙である) 場面で、その手紙を持ってきた小姓に、この秘密は「あの強い毒にも似て、それが入っていた／容器を溶かしてしまう」(424f.) と言って、露見しないように注意を促す。確かにこの秘密は、秩序の側から見れば婚姻制度に反する「毒」となるが、同時に、この愛を秘密にするというカルロスの行為は、婚姻制度がスペインの秩序内において絶対的なものである限り、婚姻制度からの逸脱において現象するカルロスの〈個〉を保存するものである。フィリップは、スペインの秩序内においてエリーザベトには常に監視をつけており、王子という立場であってもカルロスはエリーザベトと二人で会うことは許されていない。それゆえ、カルロスの愛はただ彼の心の中にのみ存在し、エリーザベトと二人きりで話し合ったり触れ合ったりすることはできない。しかし、フィリップの監視が届かない場所、スペインの秩序とは別の秩序が支配する場所も、劇の中に存在する。

第二幕第十四場及び第十五場の舞台となるシャルトルーズ派の修道院では、この宗派に属する者が沈黙と孤独の誓いを立てることで現世との関わりを絶っている。この場面に登場する修道院長もまた、カルロスがここに来た目的を聞こうとしない。カルロスとポーザの対話では、ポーザがエリーザベトとの連絡役を務めることによって、この修道院においてカルロスとエリーザベトの密会が可能であることが示唆される。修道院長は、この修道院を「避難所」と呼び、「善事であろうが悪事であろうが、正しいことであろうが徳に反したことであろうが——それは汝自身の心とともに決定せよ」(470) という掟のみが存在すると述べる。ここでは、秩序とは個人の心の中にのみ生じるため、愛と秩序の間の葛藤は存在しない。この状況が〈個を志向する自由〉の矛盾を明るみに出す。

カルロスは、フィリップとエーボリが密通していることを示す手紙をポーザに見せて次のように言う。

カルロス おれは希望を持っている。—— 顔色が変わったな？ 落ち着け、おれは幸せになるべきだし、そうなるだろう。

〔中略〕

真実だ、真実だ。

(エーボリ公女に宛てた王の手紙を取り出しながら)

この重大な手紙の中に書かれているのだ！

王妃様は自由だ、人間の目にも

天の目に映るのと同じように自由だ。さあ読め、

訝るのはやめてくれ。(472)

すでに述べたようにエリーザベトは婚姻制度に従っており、彼女には婚姻制度から逸脱する意志は見出されない。カルロスとエリーザベトの密会が可能である状況では、彼の愛にとつての障害は、エリーザベトが感じる婚姻制度に対する義務の観念である。そこでカルロスは、フィリップが婚姻の誓いを破ってエーボリと密通していたことを示し、婚姻制度

は遵守する必要のないことを明らかにしようとする。エリーザベトは「人間の目にも……自由」だとカルロスがここで言うのは、婚姻制度の義務に縛られている彼女にとって、婚姻制度に反したフィリップとエーボリの密通が根拠となって、婚姻制度からの〈自由〉ではなく、彼女が自らに課す道徳的義務からの〈自由〉が生じるために他ならない。カルロスの〈個を志向する自由〉の構造はここで反転している。カルロスの考える〈個〉は婚姻制度からの逸脱によって規定されており、婚姻制度を破ったフィリップにこそ〈個〉が現れるはずである。カルロスが持つ〈個を志向する自由〉の論理に従えば、エリーザベトはフィリップの行為に関わらず、婚姻制度からの逸脱を求めなければならない。エリーザベトとの密会が可能となり、婚姻制度との葛藤が生じないならば、カルロスには、〈個を志向する自由〉から離れて制度を志向するという矛盾が現れるのだ。

なぜ、この矛盾が生じるのか。カルロスの考える〈個〉は制度からの逸脱において見出されるが、この構造を逆転させると制度は規矩として存在することとなる。つまり、制度のないところでは、人間の道徳観を基盤とした差異だけが存在し、制度からの逸脱に〈個〉を見るというカルロスの考えは、その規矩を失う。それゆえ、制度は絶対的なものとして作用しなければならない。フィリップの監視の届かない空間、シャルトルーズ派の修道院のような制度に支配されない例外的な場所が存在するとき、婚姻制度とともに、カルロスの〈個を志向する自由〉もまた破綻をきたす。したがって、カルロスの愛が〈自由〉となりうるには、愛が婚姻制度を通じた圧倒的な成就不可能性に支えられなければならない。

4-2. ポーザにおける〈自由に孕まれた矛盾〉——ポーザの死の両義性——

ポーザは、フィリップの信頼を得て、エリーザベトとカルロスの関係を調査する権限を持つに至った。その関係に対するフィリップの疑いを逸らすことができれば、カルロスは——婚姻制度に反する愛を持っているとはいえ——安全である。カルロスを中心としたフランドルの叛乱計画の実現に関しては一つの障害が排除されたかに見える。しかし、劇の中では、アルバ、ドミンゴ、エーボリによる陰謀が進行している。エーボリがエリーザベトの手紙入れを盗むため、エーボリによってエリーザベトとカルロスの愛が露見する可能性が生じる。そこで、ポーザは政治的悟性を発揮して、その可能性を摘み取るためにエーボリを刺し殺そうとする。¹¹⁾ しかし、それは果たされない。

侯爵（天を見ながら、短剣をエーボリの胸に押し当てる）まだ時間はある。まだ毒がこの唇の上へと出てはいない。おれがこの器を打ち壊せば、すべては元通りだ——スペインの命運か一人の女の命ではないか！
（彼はその姿勢のままで、意を決しかねて静止する）（572f.）

「スペインの命運」と「一人の女の命」という二者択一に、彼の目的論的な政治的悟性と彼が目指す道徳的世界秩序の間に葛藤が生じる。彼が道徳的世界秩序の構築を目的としたと

き、叛乱計画の指揮をとるはずのカルロスがエーボリの讒言によって破滅に追い込まれれば、その目的は達成されない。しかし、カルロスの秘密を握るエーボリを殺してポーザの政治的目的にあった真実を作ることは、ポーザが嫌悪するスペインの秩序構造、フランドルの新教徒たちを殺してカトリック秩序の正当性を守る構造に限りなく近づく。ポーザは、政治的悟性に忠実に従ってエーボリを殺すことはできず、政治的目的に適い、道徳的世界秩序とも矛盾しない手段として、自己犠牲的な方法を選ぶ。

彼の自己犠牲的な計画とは、エリーザベトを愛しているのはカルロスではなく自分であるという虚構をフィリップに信じ込ませ、カルロスがフランドルに逃げ出すための時間稼ぎをすることである。当然彼はフィリップによって殺されることになるが、その嘘を真実に見せるのは、エーボリの殺害のようにポーザの政治的悟性の暴力ではなく、婚姻制度を犯したことに対する秩序の側の暴力である。そのためには、ポーザは法を犯して処罰された人間として現れなければならない。彼は言う、「彼〔カルロス〕は救われます！ どのような代償を払って救われるかはどうでもいいのです！」(581)。彼の政治的悟性の目的論的性格において、目的の「代償」としての手段は顧慮されてはならない。彼の〈人類を志向する自由〉は、自身の本来の〈個〉が人類全体のために犠牲になることでその内実を全うするのだ。

しかしポーザが殺された後、カルロスは、フィリップや廷臣たちの前で、秩序の暴力によって殺されたかに見えるポーザが実は嘘をついており、ポーザの計画は友人である自分のために企まれたことを暴露する。というのも、カルロスはポーザに政治的悟性を見るのではなく、〈個〉を見るからである。

彼の美しい生涯が愛であった。彼の
偉大な、美しい死が私に対する愛であった。

カルロスの〈個を志向する自由〉にとって、ポーザの死はカルロスに対する愛そのものとして現れる。この死は、ポーザにとっては〈人類を志向する自由〉であるとともに、カルロスにとっては〈個を志向する自由〉であるという、両義的な性格を持つ。しかし、カルロスの考えによると個を志向する愛に必要である、制度からの逸脱を、ポーザの死は現しているのか。ポーザがこの政治的行為において見ているのは王子としてのカルロス、フランドルの反乱を指揮すべきカルロスである。この政治的悟性を読み取るのは、むしろフィリップである。「あいつ〔ポーザ〕は人類という偶像のために自らを犠牲にした、あいつの代わりに人類にこの償いをさせてやろう！ ― まずは ― あいつの人形〔カルロス〕から始めよう」(629)。ポーザの死は、カルロスを破滅に追い込み、ポーザが目指す道徳的世界秩序の実現を阻むというポーザの自由に孕まれた矛盾を露呈させるのだ。

5. 〈自由に孕まれた矛盾〉のドラマトゥルギー

カルロスにおける〈自由に孕まれた矛盾〉は、フィリップの〈個を志向する権力〉に孕まれた矛盾と類似している。婚姻制度に反するカルロスの愛に現れる〈個を志向する自由〉は、制度による抑圧を受けているならば〈自由〉であるが、制度から離れた道徳的空間においては、彼が逆に制度を利用するという矛盾を露呈する。すでに述べたとおり、それは、〈個を志向する自由〉が、制度に反する愛の成就不可能性を基盤としているからに他ならない。他方、フィリップは、王としての権力をもとにして〈個を志向する権力〉を持つために、制度内においてポーザとポーザ以外の者の間に差異を形作ろうとする。しかし制度内では、唯一王だけが他の者から区別され、その絶対的な権力が示されなければならない。それゆえ、フィリップがポーザを〈個〉として認識することは王としての権力そのものを否定する。つまり、〈個を志向する自由〉と〈個を志向する権力〉はいずれも、それが成就すると同時にその基盤を失う。

また、ポーザにおける〈人類を志向する自由〉は、彼の自由思想と政治的悟性との分裂ゆえに、折り合いのつかない状態を生む。この矛盾が含む分裂の様相が、王としての権力と〈個を志向する権力〉の間の分裂にも当てはまる。上述のように、ポーザはフィリップの信頼を得て以降、カルロスとエリーザベトの関係に対するフィリップの疑いを逸らすことが可能となった。つまり、ポーザは劇空間の最上位に位置することとなり、カルロスがフランドルの解放に向かい、ポーザの自由思想を実現するよう導くために、フィリップの疑いという障害を取り除けるのである。しかし、ポーザが自由思想の実現のためにエーボリを殺害しようとしたとき、政治的悟性と自由思想との間の葛藤に苦しむ。ポーザの目的論的な政治的活動を通して、〈人類を志向する自由〉は——個々の創造物それぞれに〈自由〉が現れることで構築されるが——個人から〈自由〉を奪うものともなりうることが示される。フィリップが王としての立場に徹することができないように、ポーザもまた政治的悟性に徹してエーボリを殺すことができない。

ポーザの死にも矛盾は現れる。ポーザの死後、カルロスは、ポーザへの彼の友情をエリーザベトへの愛よりも強いものとする。「私はあなた〔エリーザベト〕に友情を／贈ることができません、昨日はまだ私の愛を／他の女に贈ることができなかったのと同じように」(644)。カルロスがポーザに友情を感じ、ポーザはポーザ以外の人間から区別される。ポーザの〈個〉は制度からの逸脱においてではなく、彼以外の人間から区別されることで現れる。ポーザの死に〈個〉を見るのはカルロスだけではない。大審問官もまた、「我々によって彼〔ポーザ〕は殺されなければならなかったのだ」(636)と言い、フィリップの行為を「殺人」と呼ぶ。大審問官にとって、ポーザは異端審問の手続きを経て、彼の自由思想ゆえに処刑されなければならなかった。しかし、フィリップはポーザに対する自らの信頼が裏切られたために、ポーザを殺したと、大審問官は考えている。ポーザ自身は〈人類を志向する自由〉に殉じたと考えるにも拘わらず、彼は他者から区別された〈個〉として認識されるのだ。ある個人がそれ以外の他者から区別される構造は王権の構造に通じる。

〈人類を志向する自由〉は目的論的行動と結びついたとき、絶対的な権力へと転じ、その矛盾がポーザの運命となるのだ。

カルロスの死もまた、彼の〈自由に孕まれた矛盾〉が運命となって引き起こされる。彼がポーザの死後、ポーザへの友情を絶対視するのは、その友情が——成就の可能性がわずかに残っていたエリーザベトへの愛とは異なり——対象の死によるその絶対的な成就不可能性によって〈自由〉となるからである。カルロスは、ポーザの遺志を継いでフランドルの解放を目指す。それゆえ最終場において、カルロスのフランドル解放計画が大審問官に露見し、カルロス自身が異端審問にかけられることが示唆されてこの劇は終わる。大審問官が裁くのはポーザに対するカルロスの友情ではなく、カルロスのフランドル解放計画である。友情から、ポーザの持つ〈人類を志向する自由〉へとカルロスの思想が飛躍したのは、〈個を志向する自由〉が孕む矛盾、つまりポーザに制度からの逸脱を見るために新たな秩序に依拠しようとしたゆえに他ならない。〈個を志向する自由〉は秩序を必要とするという矛盾が運命となり、カルロスは死ぬ。

カルロス、ポーザいずれも彼らに現れる〈自由に孕まれた矛盾〉が運命となっている。それゆえ、『ドン・カルロス』は、〈自由に孕まれた矛盾〉が劇を動かす力として働き、〈自由に孕まれた矛盾〉のドラマトゥルギーによって構成されているのだ。

注

- 1) テキストとして次の文献を用いる。Friedrich Schiller: *Don Karlos. Infant von Spanien*. Ein dramatisches Gedicht. In: Schillers Werke. Hrsg. von Paul Böckmann und Gerhard Kluge. Bd.7-I. Nationalausgabe (以下 NA と略す). Weimar 1974. 引用末尾に頁数を付す。
- 2) 例えば、シュタイガーは筋を貫く理念として友情、恋愛、人類全体の幸福のどれ一つとっても十分ではないこと、第三幕までには筋の目標指向性が欠け、第四幕以降では出来事の動機付けが欠けていることを挙げる。Emil Staiger: Friedrich Schiller. Zürich 1967.
- 3) Helmut Koopmann: *Don Karlos*. In: Schillers Dramen: neue Interpretation. Hrsg. von Walter Hinderer. Stuttgart: Reclam 1979, S.87-108.
- 4) NA. Bd.22, S.162.
- 5) 小栗浩『近代古典主義の成立』、(東洋出版、1983年) 参照。
- 6) NA. Bd. 3, S.135.
- 7) NA. Bd. 3, S.18.
- 8) 一例として、カルロスが少年時代を回想しながらポーザに次のように言う場面がある。「最後には、おれは大胆にも、おまえを無際限に愛することに決めたのだ、なぜなら、おまえと同等の者になろうとする勇気が失われたからだ」(371f.)。
- 9) Bürger dieser Welt 及び Weltbürger はいずれも、ギリシア語 *χοσμοπολίτης* の逐語訳

であり、「世界市民」を指す。Vgl. Jakob und Wilhelm Grimm: Deutsches Wörterbuch. Deutscher Taschenbuch Verlag. München 1984. Bd.28, S.1556. Vgl. Michael Hofmann: Erläuterungen und Dokumente zu: Friedrich Schiller *Don Karlos*. Stuttgart 1973.

- 10) 実際、王を記号化する廷臣たちの様子が第三幕第六場及び第七場の中に、次のように描かれている。スペインの艦隊の提督メディーナ・ジドーニアは、対イギリスの海戦の際に艦隊を率いたが、嵐に遭って艦隊は全滅してしまい、成果をあげることなく宮廷に戻ってくる。廷臣たちは、王から提督に厳しい処分が下されると予測して彼を敬遠するが、王が彼を咎めなかったために、態度を翻して彼に次々と祝福の言葉を述べることとなる。
- 11) エーボリの陰謀が彼女の改心もなく進んだとしても、フィリップは彼女を信用していないため、その陰謀は成功するかどうか疑わしい。しかし、ポーザはカルロスをフランドルの解放へ向かわせるのを阻む障害を、小さな障害も含めてすべて排除しようとしているのであろう。

Die Dramaturgie der Widersprüche in der Freiheit.

—Über Schillers *Don Karlos*—

Naoki MORI

Im Drama *Don Karlos* vergegenständlicht Schiller seine Freiheitsideen in zwei Figuren: einerseits im Don Karlos und andererseits im Marquis von Posa. Man hat in der Handlung dieses Dramas einen Bruch gesehen: Karlos ist die Zentrafigur in der ersten Hälfte des Stückes. In der zweiten Hälfte dagegen spielt Posa eine wichtige Rolle. Das Ziel meiner Abhandlung ist es, in den Widersprüchen des Freiheitsbegriffs (und nicht im Aspekt der Freiheit) eine Einheit in der Handlung des Stückes nachzuweisen.

Karlos, der Königssohn, liebt Elisabeth, die einmal seine Verlobte war und jetzt die Ehefrau des Königs Philipp ist. Diese Selbstbestimmung ist frei von der Institution der Ehe und von „der Ordnung der Natur“, dem unzerreißbaren Band des Blutes. Seine Liebe intendiert daher das Individuum, das, zu keiner Stellung des Menschen gehörig, dem Karlos von der Monarchie entfernt erscheint. Posa, Karlos' Freund, hingegen nennt sich einen „Bürger dieser Welt“, der eine Gemeinschaft der ganzen Menschheit ohne Unterschied der Gedanken und des Glauben anstrebt. Seine Idee wird durch das Gesetz einer organischen, von der Freiheit gegründeten Natur, die die Welt durch den Antagonismus ihrer Komponenten entwickelt, getragen. Der Versuch, die Flandern von der Unterdrückung des spanischen Heeres zu befreien und die sogenannte „Gedankenfreiheit“ zu ihnen zu bringen, bedeutet eine Verwirklichung dieses Gesetzes. Seine praktische Handlung ist teleologisch, weil er zu diesem Zweck Karlos und Philipp als Werkzeug, benutzen muss. Karlos' Liebe ist eine auf das Individuum gerichtete Freiheit und Posas Idee ist eine auf die ganze Menschheit gerichtete Freiheit.

Philipp als Despot hat die absolute Macht in Händen. Dazu wünscht er sich auch als Individuum die Macht über das Herz seiner Frau Elisabeth. Doch fühlt er sich als ein „Bogen, den man nur spannen dürfe nach Gefallen“. Er sucht daher einen Menschen, der in ihm nicht allein den König, sondern das Individuum sehen kann. Im Dialog mit ihm teilt Posa ihm seine Auffassung, dass der König ein Bestandteil der Natur wie andere Menschen sei, mit. Diese Idee erscheint Philipp „gerecht“, weil sie seine persönliche Macht ergänzt. Er befreit Posa von den Förmlichkeiten am Hof und schenkt ihm seine höchste Gunst. Daraus ergibt sich für Philipp ein Widerspruch: seine persönliche Macht bringt ihre Grundlage, die königliche Macht, in Gefahr, weil Posas Machtergreifung den König relativiert, indem Posa als ein Mensch erscheint.

Es gibt einen für die königliche Macht und die Intrigen der Höflinge unerreichbaren Ort im Drama, das Karthäuserkloster, wo man Einsamkeit schwört und das Schweigegelübde einhält.

Dort kann Karlos Elisabeth heimlich treffen. Er findet einen Beweis dafür, dass Philipp Ehebruch mit der Prinzessin Eboli begangen hat. Er gibt seinem Vater Unrecht nach dem selben Gesetz, das seiner Liebe zur Stiefmutter Unrecht gegeben hat. Das ist der Widerspruch in seiner Freiheit. Im moralischen Raum ist seine Freiheit außer Funktion gesetzt, weil seine Liebe zum Individuum das Gesetz als Kriterium für das Individuum braucht. Der Widerspruch hat seinen Grund darin, dass sich seine Freiheit auf die Unmöglichkeit der Vollendung seiner Liebe gründet.

In der Szene, in der Posa Ebori, die seinen Plan zur Befreiung der Flamen verhindert, gegenübersteht, kommt ein Widerspruch zwischen seinem Denken und seinem Handeln ans Licht: er muss einerseits nach seinen teleologischen Ansichten diese Frau ermorden und darf ihr andererseits seiner Idee von Freiheit zufolge dieselbe nicht rauben. Sein Tod erscheint in diesem Licht ambivalent: Karlos behauptet, dass sich Posa ihm als Individuum opfert, Philipp dagegen denkt, dass sich Posa als politischer Mensch der ganzen Menschheit opfert.

Im Drama lösen die Widersprüche zwei Arten von Freiheit aus; aber in den aufgezeigten Widersprüchen, die man in den Konzepten von Freiheit antreffen kann, zeigt sich in diesem Drama eine Einheit der Handlung.